



# Book Review

## 総義歯という山の登り方 臨床のベスト・ルートを求めて

村岡秀明・渡辺宣孝・榎本一彦 編

臨床手技には、さまざまな手法があるが、すべての歯科医師が自己流の治療法をしては予後や治療効果などが不確実となり、患者にはたいへん迷惑な話となる。そのためにEBMといわれるものがあり、基本を学ぶ場として大学教育があるものと考えている。

通常、エンドにしても、ペリオにしても、患者の病態はさまざまであるため、それぞれの病態や状態に応じてある程度のオーダーメイド治療というものが必要となる。しかし、それらの治療の根幹はエビデンスに基づいたものでなければならず、それを逸脱した治療法というものはありえない。

総義歯による治療もエビデンスに基づいた治療であることは言うまでもないが、歯科治療において総義歯ほど幅が広く、さまざまな手法がある治療法はないのではないだろうか。これは、海外とのシステムの違いだけでなく、各大学の教育内容においても多少の違いがあり、総義歯治療の面白いところであるとも言える。たとえば、下顎総義歯の床の外形はどこに設定するのか？ レトロモラーパッドは1/3、半分、すべて覆うのか？ また舌側の床縁は顎舌骨筋線をどれくらい越えるのか？ 頬側の床縁は外斜線を越えるのか越えないのか？ など大学ごとに

教育されている内容も微妙に違いがあるのが現状である。

このように大学教育でも一定の幅があるのは、患者が満足する総義歯を製作するのは本当に難しく、名医と呼ばれる先生方であっても、それぞれ経験に基づいて治療法を工夫しながら行っている。そういった総義歯特有の治療法の多彩さが、本書の『総義歯という山の登り方』という書名に象徴されているような気がする。

たとえば、本書で染谷成一郎先生がまとめられたフラビーガムへの対応を例に紹介すると、一般的な成書では、フラビーガム部は無圧にて選択印象を行うことが通法とされているが、先生はフラビーガムを立ててから印象するという、独自の手法を行っている。私も数年前に染谷先生からこの手法を教わり、実際の臨床にて行ったところ、良い結果が得られた経験がある。ここで言いたいのは、どちらが正しいということではなく、ある一定の基準を守ったうえで、患者に応じて変えていく必要があるということである。

このように本書は、不変的なEBMに加え、可変的なテクニックを盛り込んだ興味深い本となっている。学生や臨床経験の少ない歯科医師はEBMを徹底的に学ぶ必要があるため、まずは成書を読み基本を修得すべき



A4判、210頁  
定価 13,650円  
(本体 13,000円+税 5%)  
医歯薬出版刊

である。一方、臨床の現場で日々研鑽している歯科医師にとっては、本書を読むことで日本の総義歯治療を代表する開業医や大学関係者の臨床を学び、さらに付属のDVDでテクニックを見ることができる、価値のある書物であろう。

また、副題に「臨床のベストルートを求めて」とあるが、本書を読み終えて、「総義歯という山の登り方」には本当にさまざまなルートがあることを感じたと同時に、はたして自分のベストルートと言えるものは見つかるのだろうか？ という不安も出てきた。しかし、いろいろな登り方があっても最終的なゴールはみんな一緒であるということを確認した。

梶田行雄  
(埼玉県川口市・かめだ歯科医院)